



WE LOVE ふくしま



震災後の観光地「大内宿」

観光客減少の中でも変わらぬもてなしの心

福島県南会津郡下郷町にある旧街道「下野街道」沿い、江戸時代の宿場の町並みを今に残し、昭和五十六年に国の「重要伝統的建造物群保存」地区の選定を受けた大内宿。震災前は年間百万人を超す観光客が訪れていましたが、震災後の昨年四月の段階では、観光バスの乗り入れは全く見られなくなりました。大内宿の集落では、地震による建物の損傷がなかったにもかかわらず、他の観光地と同様に、ツアー客の減少に歯止めがかりません。震災に対する国民的不安が回復する気運がないことに加え、東京電力福島第一原子力発電所の事故によって、被災者が避難地として選んだ会津地方までもが風評被害の影響を受けてしまったのです。い

くら安全を訴えても観光客が来てくれなければ店を開けることもできず、大内宿で働いていた人たちもしばらくは自宅待機の状態に追い込まれました。

「来訪者が少しずつ見られるようになったのは昨年のゴールデンウィークあたりからでしょうか」。大内宿の入口近くに店を構えるそば処「大内宿三澤屋」の女将、只浦千恵子さんはそう振り返ります。「徐々に福島を応援したいからとお客さまがいらっしゃるようになり、会津地方に避難されている方々も目立って見られるようになりました。小さな旅行会社のツアーが積極的に応援する姿も見え始め、お客さまのありがたさを再確認しました」。女将さんの言葉には原発事故の風評が



▲三澤屋の店構え



▲三澤屋の女将、只浦千恵子さん



◀三澤屋の「高遠そば」(通称ねぎそば)

あつても大内宿を訪れてくれる方々への感謝の気持ちがあふれています。

震災から一年半が過ぎた現在、駐車場には観光バスが止まり、ツアー客も増えてきましたが、依然として震災前の比ではないそうです。しかし、二度目の秋を迎えた大内宿では、以前と同じように来訪する方々に楽しんでもらおうと、各店接客に余念がありません。

おいしさ健在、大内宿の名物そば

十月は新そばと紅葉がはじまる季節。大内宿と言えば、大根のおろし汁がかけられた田舎そばを、箸の代わりにネギ一本ですくって食す高遠そば、通称「ネギそば」が有名です。使用される大根は辛味のあるアザキ大根(季

節限定」が通とのこと。辛味の強さがそばの味をいっそう引き立てます。「三澤屋」もこのネギで食べるそばが人気で行列ができるほど。同店にはネギそばと同じようにソバ通好みの「水そば」もあります。三澤屋では「そば作りに大切なのは水からの厳選」ということで、中庭の深井戸から伏流水をくみ上げ、逆浸透膜方式で作られた純水を使っています。そば粉は地粉一〇〇％で、ネギやアザキ大根と一緒にそれぞれ契約農家で栽培されたものを使用。「大内宿はわき水が豊富で、井戸を持っている家が多いんですよ。ウチの井戸は一度枯れてしまいました。が、十年くらい前に掘り直しました。それで逆浸透膜の設備を導入したんです。不純物を一切取り除いた純水にこだわって、蕎麦の持つ風味を楽しんで欲しいのです」。そう力説する女将さんですが、実は店を始める際に考えていたのは大名料理の復元版だったとか。

「ウチが店を始めたのは二十六年程前なんです。当時は大内宿の観光客の入込数が年間五万人と言われ始めておりました。この地域ならではの料理を出してお客さまを増やせばと思います。じゅうねん和えや岩魚の煮浸しなど文献を参考に研究し、再現してお膳にしましたが、それなりの評価は得られたもののいまいち納得できず、すぐに〃蕎麦とお餅で振る舞うお店〃に変えました」と女将さん。当初、大名料理にこだわった理由は、



▲子安観音前の見晴台から眺めた大内宿町並み

会津藩祖保科正之公が信州高遠で育ち、やがて会津藩主となり「諸宿駅令」に基づいて大内宿を整備されたことにちなんでのこと。また、大根のおろし汁に醤油（当時は焼き味噌）で食すことも保科正之公がもたらした文化と考えられています。三澤屋では、この高遠そばにネギを添えてすくって食す方法を遊び心で提供しているそうです。

“心のふるさと”であり続ける大内宿

大内宿は、全長約四百五十メートルの道の両側に、妻を向けた寄せ棟造りの茅葺き民家が建ち並ぶ、五十軒程の集落。かつては炭焼き・薪づくり・葉タバコ・高原大根の栽培……等々が生業となっていた村でした。大きな転

換期を迎えたのは昭和五十六年に国の選定を受けてからで、それを機に観光地として生まれ変わります。土産物や蕎麦屋などを営みながら建物の修理修景や景観保存に努めるようになりました。

十一月後半になると大内宿は雪囲いが施され冬支度を始めます。大内宿の雪景色もまた風情があり、あえてこの季節に訪れる人もいるほど。三澤屋の女将さんによると、九代目当主の只浦豊次さんは冬の大内宿を盛り上げようと様々な取り組みを行っているそうです。二月に開催される「雪まつり」は、旧本陣跡を中心に多彩な催しが繰り広げられる冬の風物詩となりました。夜になると、屋並み沿いに並んだ多数の雪灯ろうのほのかな灯りで、幻想的な光景を目にすることができま

す。土地に愛着を持ち暮らす大内宿の人々にとって、大震災と原発事故は生活を一転させるほどの影響力でした。「大内宿だけでなく福島にとって事故のショックは大きくて、長く続くと思います。元気になるにはパワーがいりますが、みんなで力を合わせて次世代までつなげられれば」と、女将さんは静かに語ります。